

千葉県の図書館振興 1930-1945年 廿日出逸暁の図書館振興

松田 典之

Library Promotion in Chiba Prefecture 1930-1945 Hatsukade Itsuaki's Library Promotion

Noriyuki MATSUDA

Abstract

When Itsuaki Hatsukade became the director of the Chiba Prefectural Library in 1930, he believed that establishing a library in a community would lead to the rehabilitation of rural areas, that is, regional development. As a measure to promote the library of the prefectural library, a loan library was implemented with the aim of providing knowledge useful to the community, which was to deepen knowledge about libraries by establishing reading groups and cultural groups in the region and allowing them to use the loan library, and to serve as the foundation for the establishment of public libraries in the region. Prior to the advent of mobile libraries, prefectural library promotion measures from 1930 to 1945 were mainly implemented by lending libraries.

Key-words

廿日出逸暁 千葉県立図書館 貸出文庫 読書指導 図書館行政

1 先行研究

廿日出逸暁（はつかでいつあき）（以下、廿日出）は、千葉県立図書館（以下、県立図書館）の最初の専任館長である。廿日出は1935年に県立図書館長に就任し、1959年に国立国会図書館連絡部長になるまで、千葉県の図書館の振興に努めた。⁽¹⁾

廿日出の業績として、『図書館人物事典』では以下の3点をあげている。

- ① 県立図書館の経営と県下図書館事業の育成にあたった。とくに1949年に開始した移動図書館「ひかり号」の運行は、戦後図書館改革の先駆となった。
- ② 日本図書館協会で図書館法制定に尽力した。
- ③ 文部省図書館講習所、実践女子大学、千葉経済短期大などで図書館員育成に従事した。⁽²⁾

この中で、①について、移動図書館車「ひかり号」の運行については、廿日出の業績として、最も評価され、これについての学術論文も多く出されている。「ひかり号」については日本図書館研究会オーラルヒストリー研究グループ『文化の朝は移動図書館ひかりから千葉県立中央図書館ひかり号研究 文化のひかりから』にまとめられている。⁽³⁾

廿日出自身著書として、『図書館活動の拡張とその背景：私の図書館生活50年』がある。これは廿日出の論文や著作物をまとめたものであるが、第二次世界大戦前の著作は掲載されていない。⁽⁴⁾

廿日出の県立図書館長時代のその他の図書館行政については、「千葉県図書館史」⁽⁵⁾「千葉県立中央図書館三十年略史」⁽⁶⁾で語られている。これらには、千葉県の図書館行政が編年体で記述されており、廿日出自身

もその編纂に関わっている。

廿日出館長時代の貸出文庫については、中山愛理「ひかり号の源流と実現への道：アメリカとの関わりを中心に」があるここでは、廿日出が「ひかり号」導入にあたり日本とアメリカがどう関わり、どのような認識を持っていたか検討されている。⁽⁷⁾

奥泉和久「千葉県立中央図書館、廿日出館長時代の図書館政策：分館設置を中心として」では、廿日出館長時代の千葉県の図書館政策について、分館の設置を中心に述べられているものである。奥泉は「千葉県における図書館振興策には、図書館令に拠る指導原理にとらわれない、独自の経営理念があったとかがえる」とし、また「館長が同一人物であることから、戦前、戦後の図書館政策に関し一貫性があったと考えてみる必要はあるだろう」とする。戦前・戦中期に千葉県独自の図書館振興策があり、それが戦後も継続していたことを示唆している。そして、「廿日出は、館外サービスを実施する前に戦前においては市町村に図書館づくりのための要件を備え、戦後はそれらの地域に分館を置いて、市や町が図書館を運営するための基盤整備を行った。そして、そうした組織的な運営の一環に戦前は貸出文庫、戦後は移動図書館などの館外サービスを位置づけた」として、戦前・戦中期には県の図書館振興策として貸出文庫が位置づけられていたことを明らかにしている。しかしながら、千葉県の図書館振興策として貸出文庫とはどのようなものであったか明らかではない。⁽⁸⁾

本稿では、戦前・戦中期の千葉県の図書館振興策としての貸出文庫について明らかにしていく。このことは今後の千葉県の図書館行政を考える上でも有益であると考えられる。

2 1935年前後の千葉県立図書館を取り巻く状況

第2章では、廿日出が千葉県立図書館長に就任した1935年前後の千葉県立図書館を取り巻く状況を明らかにしていく。

2.1 1935年前後の千葉県の状況

1929年アメリカ・ウォール街の金融市場から始まった世界恐慌は、日本にも大きな影響を及ぼした。その結果、物価、株価の暴落、企業の倒産、失業者の未曾有の増加などが発生した。農村においても、農産物の個々の値下がりや農家の生活水準の低下などが起きた。全国的な農村の疲弊を救済するために政府は、1932年に、ラジオ放送で自力更生運動を呼びかけた。さらに、国、県、郡、市町村に経済更生委員会を設置し、産業組合を中心とした経済更生計画を策定させた。⁽⁹⁾

千葉県下では、農産物価格の下落や失業者の帰農により、小作料の不納・未納さらには土地の取上げが起こり、小作争議が激化した。千葉県では石原雅二郎知事のもと、農村の工業化が図られた。農村の工業化とは、農村の行き詰まりを打開するために、①県内各地に適地適合の家内工業と農村工業を勧奨する、②共同作業場又は加工場を設置する、③中心的技術者を養成する、④伝習所を開設する、⑤製作技術を伝習する、⑥事業の助成並びに金融について考究する、というものであった。⁽¹⁰⁾

1933年、大日本連合青年団では、「青年が自力更生の中心力となり、その第一線に立って、健闘しなければならない」とした。⁽¹¹⁾千葉県では昭和八年度（1933）の予算で青年教育が急務であるとして、青年指導費を増額し、千葉県社会教育課では篤農青年懇談会を企画した。篤農青年懇談会は中堅青年の養成を意図したもので、研究、体験発表を内容としたものである。千葉県連合青年団では新事業として、青年特技共進会を企画している。青年特技共進会は、青年の研究心の向上を計り、経済更生の資たらしめることを目的としたもので、1934年1月第一回青年副業品並に一人一研究資料展覧会と改められて実現した。県連合青年団は、県社会教育課と県連連携して、県下の自力更生運動に大きな役割を果たしている。⁽¹²⁾

このように農村青年による研究活動の活発化により、千葉県では農村における図書の需要が高まっていたと考えられる。

廿日出は1936年、『千葉文化』に「農村更生と図書館」

という論文を掲載している。その中で廿日出は、「真の農村更生を計る根本的な施設は何を差し置いても図書館を各農村に設けることを除いた以外には見出し得ないと思うしこの施設が最も農村を根本的に救い更生させ得る唯一の道と思うのである」としている。また「農村青年の行く可き道は唯一つである。それは図書館である。図書館は人間完成の殿堂であり、民衆大学であるということは古今東西の先賢偉人により如実に物語られているのであるが、相談すべき人もなく又訪づべき図書館のない農村青年に同情せざるを得ないのである。私はここに於て書物に親しむ機会を一日も早く彼等に与えたいという念願を持つものである。換言すれば一村一館、よって以て農村更生の殿堂を設立し真の同情者、指導者、先輩たる役目を果たしたいと言う希望を持っている」と述べている。⁽¹³⁾ 廿日出は口癖のように「村づくり」を口にし、県の図書館行政の経営方針とした。⁽¹⁴⁾

2.3 1935年前後の図書館界の現状と読書指導

2.3.1 図書館令の改正

図書館令は、1899年に制定された図書館法規である。1933年に、「図書館令」の大幅な改正があった。また同時に、公立図書館職員令も改正され、図書館の職員制度が整備された。

改正図書館令と公立図書館職員令の特徴は、以下の4点である。

- ① 図書館で行う社会教育的な集会活動、読書会、講演会、展示会、掲示教育に類するものが、法規上明文化された。
- ② 図書館には館長並びに司書をおくこととし、職員制度を「整備」した。それまで公立図書館のみを認可制としていたのを、私立図書館を含め一切の図書館を、認可制にしたこと。
- ③ 中央図書館制度を新設した。

改正図書館令における「中央図書館」は、同一都道府県内で、文部省の指定したひとつの図書館が都道府県内の他の図書館の「指導・連絡・統一」をはかる機能を持った図書館である。従来の公立図書館

職員令では、道府県図書館長は、管下の図書館を視察する権限を持っていなかったが、改正図書館職員令では、中央図書館長は、管下の図書館視察ができることが規定された。千葉県では県立図書館が中央図書館に指定されている。⁽¹⁵⁾

3 1935年前後の千葉県図書館界

第3章では、1935年前後の千葉県図書館界を取り巻く状況について千葉県立図書館を中心に明らかにしていく。

3.1 図書館令施行細則の公布

1933年6月に図書館令が改正されると、各道府県では図書館令施行細則を制定せねばならなかった。千葉県では1935年12月1日に図書館令施行細則を公布し、12月10日には、県下公私立図書館長会議で、以下の5項目の趣旨説明を行った。

- ① 図書館設置の普及奨励に関すること。
一町村一館主義を実施するために市町村立図書館の設置を奨励する。新規の図書館設置には奨励金を出すよう規定した。
- ② 既設図書館の内容充実に努めること
- ③ 図書館の所蔵冊数と図書購入費の標準を示した。
- ④ 図書館員の待遇改善をなすこと
蔵書5,000冊、人口1万以上の処には必ず専任職員を置くこと、また兼務職員でも無給者のないようにする。成績優良な職員は選奨の途を示した。
- ⑤ 図書館経営の機能拡充を図ること
図書館の経営を館内閲覧から積極的に各家庭まで延長するよう貸出文庫其他の方法により実施するため規定を定め、そのための図書館後援団体、或は附帯事務の補助者をおくことを規定した。
- ⑥ 中央図書館の機能を発揮すること
職員員の教習施設を中央図書館におけるよう規定した。⁽¹⁶⁾

3.2 千葉県内の図書館の状況

廿日出は、昭和10年度に県下7ヶ所で開かれた図書館経営研究会で、千葉県内の図書館の現況は、極めて貧弱であり、その原因として、①予算の不足、②独立館舎が少ない、③専任職員の不足、④利用者の固定化をあげ、このような状況では、図書館機能の十分な発揮は望めず、また図書館経営者が中央図書館との連絡、その他図書館経営発展充実等につき充分その使命達成に努力しているとは見えない。これは千葉県図書館令施行細則の趣旨が徹底していないことにその原因があるとしている。これらの現状を改善するために、啓発促進に今後一層の努力を傾注すると共に県民に対しても、図書館に関する認識を深くするよう努力が必要であることを痛感したと述べている。⁽¹⁷⁾

3.3 県内各地へ出張と各種会議の開催

廿日出は、図書館令施行細則の趣旨を実際に県下図書館の運営に反映させるため、千葉県内各地を廻り、会議、協議会、講習会等を開催した。また、県民の図書館認識を深めるため、読者奨励講演会を開催している、その際には、職員1人を伴い、図書館理解のための紙芝居を実演した。地域の文化団体、特に貸出文庫を利用する団体には積極的な働きかけを行っている。⁽¹⁸⁾

1940年に東条村文化協会が設立された際には、廿日出は来賓として記念講演会を行い、読書会について語っている。その内容は読書会とは何かというものだった。⁽¹⁹⁾

4 千葉県の貸出文庫

4.1 中田邦造の読書指導

1938年頃から、読書運動への関心が高まり、各県の中央図書館が市町村図書館にたいし、読書指導の実施を奨励した。その際、モデルとされたのは、石川県立図書館長、中田邦造（以下、中田）が農村青年を中心とし組織・活動してきた読書指導であった。⁽²⁰⁾

中田は、1922年、石川県立図書館館長事務取扱になってから、1940年に東京帝国大学図書館司書官に転任するまで、読書指導に取り組んできた。中田は、教育の本質を終生の自己教育ととらえ、読書によってそれが

達成されると考えた。中田の読書指導は、読者を、知識や能力に応じた三つの読者集団に分け、それぞれの集団の能力や関心に応じた図書、すなわち「図書群」を提供する、ものである。⁽²¹⁾

中田の図書群の概念は、読書指導計画と結びついており、図書群を一定期限内に読了することにより、知識を身につけさせるだけでなく、生涯を通じて、自ら学習する力を育てることに主眼があった。⁽²²⁾

4.2.1 国民読書指導

1937年、日中戦争が開始されると、戦争協力のための思想統制のために、国民精神総動員運動が開始された。その目標は挙国一致・尽忠報国・堅忍持久であった。⁽²³⁾

翌1938年、文部省は国民精神総動員文庫費を予算化し、各道府県立図書館に交付して貸出文庫を国民皆読、読書錬成のためのものとした。⁽²⁴⁾

1938年5月に開催された第三二回全国図書館大会で文部大臣諮問「国民精神総動員ノ徹底ノ為図書館ノ採ルベキ方策如何」に対し、日本図書館協会は、①国民精神総動員に関する図書目録の編纂、②国民精神の作興、東亜問題の認識、科学知識の涵養、職業的実生活の修練に資する図書、軍事・国防・産業、経済、資源、列国事情に関する良書の選択に留意し、その活用の企図。特に貸出文庫の普及、③青年学校及び青年団と協力して青年の読書活動を盛んにして国運進展の基礎を固めること、④銃後の施設として、陣中文庫、傷痍軍人文庫、出征遺家族慰安文庫等の設置の四点を答申している。③で「青年学校及青年団ト協力シ大ニ青年ノ読書教育ヲ盛ニシ以テ国運進展ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルコト」と答申し、新たに青年にたいする読書運動の必要性が取りあげられることになった。⁽²⁵⁾

1940年代になると、図書館界は「戦時下における図書館の役割を模索しはじめ」（日本図書館）「協会は戦時下に生きのびるため、読書指導を館界に運動として拡大しなければならず」、図書館界の最重要な活動分野になっていった。日中戦争下の国民精神総動員運動の初期段階における図書館活動は、それまで実施されてきた目録作成・文庫編成・展示などの活動を徹底させ、

その内容については時局に関するテーマを扱うものであった。したがって、中央図書館・貸出文庫中心という従来の図書館の活動方法は変わっていなかった。⁽²⁶⁾

4.2.2 読書会

国民読書指導の目的は、特定のイデオロギーを図書群によって、読書会を通じて浸透させるという、思想教化策であった。その際、貸出文庫によって特定図書を読書会に貸出し運営すれば、効果的と考えられた。⁽²⁷⁾

1942年の第一回日本図書館協会部会総合協議会での、文部大臣諮問「大東亜共栄圏建設ニ則シテ国民読書指導ノ方策如何」に対して日本図書館協会は、読書指導組織ヲ確立スルコト

- イ、学校教育ニ於ケル読書指導ヲ強化スルコト
- ロ、図書館ニ於ケル読書指導ヲ積極的ナラシムルコト
- ハ、読書団体ヲ育成シ集团的読書ノ方法ヲ講ズルコト
- ニ、家庭、隣組、職場等国民組織ニ於ケル読書指導ヲ徹底セシムルコト
- ホ、読書指導ノ大綱ハ文部省之ヲ定メ道府県ニ於テハ読書指導ノ機関ヲ設置シ適切ナル企画及指導ニ当ルコト
- ヘ、各種団体ノ読書指導者ヲ養成スルコト、放送、映画等ヲ利用シ国民全般ノ読書指導ヲナスコト

以上ノ方策ニ依リ、国民読書指導ノ最モ強力ニシテ適切ナル機関ニ参画セル我等図書館員ハ先ヅ現実ニ即シテ、自ラノ任務ニ挺身スルハ勿論ナレドモ、ソノ目的ノ完遂ニハ、当局ノ強力ナル指導ノ発動ト財的援助トヲ要スルモノト認ム

と答申した。⁽²⁸⁾

1942年、文部省は石川県金沢市で「読書会指導に関する研究協議会」を中央図書館長を招集して開催しており、廿日出もこれに参加している。同じ年、文部省は日本図書館協会と共編で『読書会指導要綱』を作製している。⁽²⁹⁾

4.3.1 千葉県立図書館の貸出文庫

1907年に千葉県は、巡回文庫を設置している。千葉県通俗巡回文庫規則によれば、巡回文庫は、県内60カ

所の小学校に閲覧所を設け、年1回以上巡回するものであった。⁽³⁰⁾

1908年に新潟県にある積善組合が、全国の巡回文庫を調査している。その際、千葉県通俗巡回文庫について、文庫を実際に運営するのは、小学校の教員であるが、教員の中には、文庫の運営は義務以上のものではなく、厄介視するものが少なくないこと、文庫を利用する者がその小学校の卒業生で年少者が大半を占め、その他は管理者から閲覧するよう求めた者以外は、自ら進んで利用するものがないと報告している。⁽³¹⁾ 千葉県通俗巡回文庫は、石原知事が転任したこともあり、設置2年目で頓挫してしまった。

廿日出が館長に就任する以前にも、県立図書館に貸出文庫の制度はあったが、予算は少額であり、利用は少なかった。

廿日出の就任後の昭和11年度には予算を大幅に増額し、兼任ではあるが、係職員司書1名を置いたところ、利用が大幅に増加している。⁽³²⁾

県立図書館は1937（昭和12）年に、移動図書館を計画している。これは陸軍から軍需用トラックを借り受け、移動図書館車に改造するというものであり、昭和13年度予算として予算要求したが、却下されてしまった。

1938年、国民精神総動員運動が展開されると県立図書館に上記の国民精神総動員文庫費が交付され、貸出文庫はその中に取り入れられていった。⁽³³⁾

1942年9月には読書会指導要綱を作成して読書会指導の手引とし、1943年9月には読書会組織の拡充強化費を中央図書館に交付し1941年には市内美容院、理髪店等にも図書を貸出し、同年9月には隣組文庫を開始している。⁽³⁴⁾

隣組文庫の目的について、廿日出は、農村では図書館の利用者は少数に限られ、一般村民とは何の縁のない存在になっている、村立図書館の本を青少年団なり婦人会なりの手で家庭から家庭へ廻してもらう。図書館が一般村民の身近いものとし、多数の人々に読書の機会を與えるために、県下の図書館で同様の事業をやってもらいたいのでその見本を示すために始めたと言っ

ている。⁽³⁵⁾

県立図書館では、貸出文庫の主な利用対象を農山漁村の青年層に置いており、青年層の利用を促進するために、「先づ読書を実生活に」というスローガンを掲げて運営をした。⁽³⁶⁾

表1

	貸出箇所数	文庫貸出数	備考
図書館	4	11	その他 農事実行組合、愛国婦人会、報徳社、産業組合、信用販売購買組合等
国民学校	14	58	
中等学校	6	30	
青年学校	11	31	
青年団	50	264	
その他	9	19	
計	94	413	

表1は1940年度の統計で、貸出文庫の大部分は、青年団、青年学校などの青年層によって利用されている。

1940年度の貸出文庫の貸出種別については、文学類の希望が多い。一般小説類中でも特に戦争文学、日中戦争変を主材とした小説類が貸出されている。その他、短歌、俳句等も多く読まれている。次に産業関係図書、歴史、伝記、地誌(日本を始め、東洋、西洋に関する比較的平易なる歴史物、個人の伝記、各国の地理、紀行、軍事、政治、経済、新体制を説いた図書、戦時下の平易な経済関係図書、国際事情、国民道徳、修養、体育、衛生に関するものなどが多く利用されている。⁽³⁷⁾

貸出の内容を見ると、確かに「時局物」と呼ばれる戦時を扱った図書の貸出もあるが、文学、産業、歴史物なども多く読まれており、文部省が意図する国民読書としての効果は不明である。

4.3.2 貸出文庫利用者大会

1940年～41年には貸出文庫利用者大会が開かれている。1941年3月に開催された貸出文庫利用者大会では、貸出文庫利用団体の体験発表や質疑応答とともに、優良文庫の利用者表彰が行われている。昭和16年度に表彰された団体は、①東葛飾郡馬橋村六和 興農同人クラブ、②市原郡市原村 影井信男、③印旛郡弥富村坂戸 林文雄、④千葉郡更科小学校長 大岩益三、であっ

た。①の興農同人クラブは、中堅青年講習修了者懇談会で、廿日出による貸出文庫利用に関する講演を聴き、青年団に貸出文庫が設立され、その利用者によって設立された団体である。興農同人クラブは、様々な事業を行っているが、貸出文庫の利用で得た知識により、燠炭製造竈の共同設置、水稻栽培の研究を行っている。②の影井信男は、市原村青年団の貸出文庫の責任者であった。市原村青年団は1936年より貸出文庫を利用している。貸出文庫を利用したことにより、以上の効果と影響があったと報告している。効果としては、①産業上研究資料を得たこと。穴澤式甘藷栽培の経営実施、促成栽培の合理的研究、水稻増産計画の研究等の資料が得られた。②一人一冊主義で、必読励行をしたところ、読書技術の向上し、また新聞雑誌の利用が増加した。影響として、①村民全般が読書に対して関心を持つようになった、②村立図書館設立の気運醸成の一助となった、ことを挙げている。

市原村青年団では、1939年に、村民から寄贈を受けた書籍と、寄付金300円で青年団図書館を開設している。これに対して、廿日出は、青年団の文庫利用状況視察に来村した際に、この図書館を、村立図書館として村営移管するよう助言している。これによって市原村青年団図書館として昭和16年度より市原村に移管されることになった。⁽³⁸⁾

廿日出は、この他にも地域住民による公立図書館設置を進めており、1943年に、鴨川文化協会の原進一(後に鴨川町立図書館長)に公立図書館を建設するように勧めている。公立図書館であれば、(県立図書館が)図書の配給を手配するという内容であった。⁽³⁹⁾

4.3.3 貸出文庫の評価

『千葉県移動図書館ひかり20年史』では、貸出文庫について、次のように評価している。

- ① 対外活動からいって本館の場合、貸出文庫と移動図書館は兄弟といえる。
- ② 移動図書館運営の原型を示した。
- ③ 地域における移動図書館利用の素地を養った。
- ④ 貸出文庫の限界が明確になり、団体貸出ではなく、

個人閲覧方式の移動図書館による県民サービス方法を実行することが、対外活動上残された最良の道であることを発見させた。⁽⁴⁰⁾

貸出文庫はあくまでも団体貸出であり、図書館員が直接利用者に行うサービスではない、貸出文庫の限界はそこにある。図書館振興を行うためには、個人閲覧方式のサービスを行う必要があると考え、これを解決するために移動図書館の導入が必要であると考えていた。

4.3.4 千葉県における貸出文庫の特徴

前述のように、県立図書館の貸出文庫は青年層を中心に利用されている。その貸出文庫で利用された図書は、貸出文庫の利用を促進するため、「先づ読書を実生活に」というスローガンのもと、小説や実用書が中心となっている。これは、中田の目指す自己教育力の育成や、文部省の意図する特定のイデオロギーを、読書会という集団読書形態を通じて浸透させるという、思想教化策とは異なっている。廿日出は戦後、中田の読書指導は図書群を使って集団で行うもので、自分ももっと自由にやるべきだと考え反対した、と述べている。⁽⁴¹⁾ 貸出文庫を通じて、青年層に実生活に役立つ資料を提供することにより、図書館に対する認識を深化させることに主眼を置いているのである。さらに、これら地域の青年団体や文化団体を核として、公立図書館を設立するという構想がうかがえる。廿日出は、図書館振興策の一つとして、地域団体を核とした公立図書館の設立を進めていた。

5 戦争の終結

戦況の悪化に伴い、兵役や動員により農村部に青年層が減少してくると、貸出文庫の維持が難しくなってきた。廿日出は1943年に『銃後千葉』という千葉県の郷土部隊を対象とした慰問誌を編集している。この中で、「銃後の建設」という記事では新設された野田興風会図書館、中央図書館の貸出文庫を借りる農村青年、国民皆読等の写真を掲載しており、兵役について千葉県の青年に図書館をアピールしている。⁽⁴²⁾ 1945年7月の千葉市空襲により、県立図書館に罹災団体が

避難してくると、県立図書館の機能が停止し、戦前・戦中期における図書館振興は終焉を迎えた。

6 考察

1930年前後、千葉県の農村は疲弊しており、県立図書館長に就任した廿日出は、図書館を地域に設立する事が、農村の更生、すなわち地域振興につながると考えていた。そして、個人閲覧方式の、移動図書館が県立図書館の図書館振興策として最適であると考えたが、当時の社会状況がそれを許さなかった。日中戦争が始まり、国民の戦争協力体制構築を図るため、国民精神総動員運動が開始され、図書館では貸出文庫が用いられなかった。千葉県の貸出文庫では、精神修養や思想強化を第一の目的とはせず、地域に役立つ知識の提供を目的としていた、これは地域に読書団体、文化団体を設立し、貸出文庫を利用させることにより、図書館に関する知識を深化し、さらには地域での公立図書館設立の基盤とするものだった。後に「移動図書館は直接市町村図書館設置を目的とする図書館の宣伝車」⁽⁴³⁾とされているが、移動図書館登場以前には貸出文庫がそれを担っており、1930年から1945年までの県立図書館の図書館振興策は貸出文庫を中心に実施された。廿日出は県内各地を周り、読書団体、文化団体の設立に奔走していたが、戦局の悪化とともに、主たる利用者であった青年層が減少したことや、空襲により県立図書館の機能が停止するなどにより戦前、戦中期の図書館振興策は終焉し、戦後に引き継がれることになった。

7 課題

本稿では、1930年から1945年までの千葉県立図書館で実施された廿日出逸暁の図書館振興を、貸出文庫を中心にみてきたが、同時期、長野県立長野図書館（以下、県立長野図書館）でも同種の施策を実施している。⁽⁴⁴⁾

この当時の県立長野図書館長は、乙部泉三郎（以下、乙部）だった。乙部と廿日出は、帝国図書館長、松本喜一の両腕と言われていた。⁽⁴⁵⁾

乙部は県立長野図書館において、県内図書館の視察、農村図書館の建設推進、青年団図書館の公立化促進な

どを行った。またそれについての著作もある。乙部の図書館施策が廿日出のそれにどのような影響を与えたか、また両者にどのような違いがあったかについては、今後の課題としたい。

参考文献

- (1) 廿日出逸暁『図書館活動の拡張とその背景 - 私の図書館生活50年 -』図書館生活50年記念館刊行会 p384 1981.
- (2) 日本図書館文化史研究会『図書館人物事典』日外アソシエーツ p216 2017.
- (3) 日本図書館研究会オーラルヒストリー研究グループ「文化の朝は移動図書館ひかりから 千葉県立中央図書館ひかり号研究」日本図書館協会 2017.
- (4) 前掲(1)
- (5) 千葉県図書館史編纂委員会『千葉県図書館史』千葉県立中央図書館 1968.
- (6) 千葉県立中央図書館創立三十周年記念事業後援会『千葉県立中央図書館三十年略史』千葉県立中央図書館 1956.
- (7) 中山愛理「第4章 「ひかり号の源流と実現への道：アメリカとの関わりを中心に」」日本図書館研究会オーラルヒストリー研究グループ『文化の朝は移動図書館ひかりから 千葉県立中央図書館ひかり号研究』日本図書館協会 p160-175 2017.
- (8) 奥泉和久「第2章 「千葉県立中央図書館、廿日出館長時代の図書館政策：分館設置を中心として」」日本図書館研究会オーラルヒストリー研究グループ『文化の朝は移動図書館ひかりから 千葉県立中央図書館ひかり号研究』日本図書館協会 p114-138 2017.
- (9) 千葉県農制度史刊行会『房総農業史』青史社 p75 1980.
- (10) 池田宏樹『大正・昭和期の地方政治と社会』彩流社 p161 2014.
- (11) 『千葉県青年団協議会二十年史』千葉県青年団協議会 p38 1980.
- (12) 前掲(11) p38.
- (13) 廿日出逸暁「農村更生と図書館」『千葉県図書館報』第42号 千葉県立図書館 p1 1936.
- (14) 前掲(6) p40.
- (15) 前掲(5) p76.
- (16) 前掲(5) p98.
- (17) 前掲(5) p109-110.
- (18) 前掲(5) p96.
- (19) 野村みのる「読書賛美」『鴨川』第1巻第2号 鴨川市立図書館 p10 1965.
- (20) 岩猿敏生「日本図書館史概説」日外アソシエーツ p227 2007.
- (21) 高岡裕之「解説 三 読書運動」『資料集 総力戦と文化』第2巻 大月書店 p512 2001.
- (22) 前掲(20) p229.
- (23) 木坂順一郎「国民精神総動員運動」国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第5巻(け〜こほ) 吉川弘文館 p692 1985.
- (24) 前掲(5) p114.
- (25) 「文部大臣諮問」『図書館雑誌』第32巻第7号 日本図書館協会 p2 1932.
- (26) 前掲(21) .
- (27) 前掲(20) p232.
- (28) 国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第8巻 社会教育2 202p 1974.
- (29) 前掲(20) p232.
- (30) 千葉県教育會「千葉教育史 巻4」青史社 p.444-446 1979.
- (31) 鷺尾義房「図書館視察概要」積善組合 p.13-19 1908.
- (32) 前掲(5) p40.
- (33) 前掲(6) p103.
- (34) 前掲(6) p40.
- (35) 「無形資産を蓄積せよ 読書界新体制と廿日出さん」『読売新聞 千葉版』1941.9.12.
- (36) 「昭和十五年度貸出文庫利用概況」『千葉文化』第3巻第3号 通巻22号 p11 1941.
- (37) 前掲(36) .
- (38) 影井信男「貸出文庫利用より図書館設立まで」『千葉文化』第3巻第3号 通巻22号 1941.
- (39) 千葉県立文書館所蔵「(財)近現代64 鴨川市貝渚 須永家文書」.
- (40) 『千葉県移動図書館ひかり20年史』千葉県立中央図書館 1970.
- (41) 「座談会 館界の敗戦前後」『図書館雑誌』第95巻第8号 p36-45 1965.
- (42) 廿日出逸暁『銃後千葉』銃後千葉発行所 1943.
- (43) 前掲(41) p32.
- (44) 新藤透「乙部泉三郎の生涯と農村図書館論・選書論・読書論」『乙部泉三郎・県立長野図書館長 - 農村町村図書館経営論』図書館学遺産セレクション3 別冊 金沢文圃閣 2019.
- (43) 前掲(41) p38.